

佐賀新聞 2010(平成22)年1月30日(土) 県内文化欄 文化時評2010【美術】

7 さが文化 2010年(平成22年)1月30日(土曜日)

県内文化

美術

野中 耕介

わたしの父は中学生のころ、担任の先生に「絵がなかなかうまい」と褒められたことが密かな自慢だったようで、時々、うれしそうにわたしに語ってくれたものである。製図を生業としていた父は、すでに少年時代から、

ものの構造や配置を的確に把握する目を備えていたのだろう。しかし、父が絵を描くのを、わたしは一度も見たことがない。父にとっての絵とは、対象の正確な「再現」であり、「表現」ではなかったのかもしれない。

現在、県立美術館で開催中の特別展「近代との遭遇」に、(2月14日まで)に、洋画家久米桂一郎の父で、歴史学者の久米邦武が描いた「絵が展覧されている。絵といっても、墨や鉛筆によるメモといったほうが正しいのだが、その中のひとつに横写と扱はしき女性像がある。とても小さな作ながらよい出来で、鉛筆で実

久米の絵に父子の絆

に丹念な陰影が施されている。邦武は岩倉使節団の一員として、1867(明治4)年から欧米を巡り、そこでの体験、見聞を細大漏らさず書き(あるいは描き)綴り、『米回覽実記』を著した。そんな邦武の精緻な目が、この小さな絵―おそらくかの地で目

撃した油絵か挿絵をとっさに写し取ったのである。―にも、確かに生きていると感ずる。息子の桂一郎は自身の回顧録の中で「幼い頃、父が外国から持ち帰った写真や絵画に触れたことが、絵の道に進むきっかけとなったかもしれない」と語っていた。その時、桂一郎は、こ

れら父のメモ(絵)も見ていたのではないか。桂一郎は父の優れた観察眼を知るとともに、普段は見せることとはなかったであろう、父のささやかな絵心にも、幼い心を動かされたのではないだろうか。全体の展示の中で、邦武の絵はすっかりすると見過ごしてしまうほど小

さなものである。しかし、息子桂一郎の洋画家としての成長と活躍の姿を見た時、父邦武の小さな絵が、大きな存在感をもって立ち上がってくる。父の美の本質への視線と探究心は、息子へと受け継がれ、日本近代洋画の発展へと結実した。絵の中にあらわれた父子の絆―久米親子の展示を見ていて、ふと、そんなことを思いをはせたのだ

絵を褒められたというわたしの父のことばが、もしかするとわたしにとって、美術にたいする興味の最初のきっかけになったのかもしれない。だとすれば、今こそいおう、父よ、本当にありがとう、と。

(県立美術館学芸員)

文化時評 2010